

石川淳 年譜

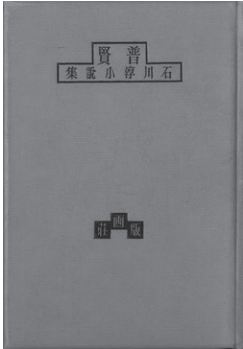
（本年譜は、石川淳全集（筑摩書房）、「新潮日本文学アルバム65 石川淳」（新潮社）、鈴木貞美編「石川淳年譜」に
ばる）1988年4月臨時増刊「石川淳追悼記念号」所収）ほかを参照し作成しました。

明治32年 1899年	0歳	3月7日、東京市浅草区寿町に父・斯波厚、母・寿美の次男として生まれる。幼時から浅草区三好町に住む漢学者の祖父・石川介（号：省齋）と祖母・はなのもとで育った。
明治38年 1905年	6歳	4月、精華小学校に入学。この頃から祖父より「論語」の素読を受けた。4年時に新堀小学校に編入。
1912年 明治41年 大正元年	13歳	4月、私立京華中学校に入学。この頃、同校に進んだ幼友達の高橋邦太郎と和漢の古典や江戸文学、夏目漱石の作品に親しみ、淡島寒月や秋田雨雀、また「新思潮」の松岡譲を訪ねたりした。浅草では映画や落語、講談、歌舞伎を楽しむ。
1914年 大正3年	15歳	7月、正式に石川はなの養子となる。
1916年 大正5年	17歳	3月、京華中学を卒業。4月、慶應義塾文科に入学したが半年で退学。
1917年 大正6年	18歳	4月、東京外国語学校（現・東京外国語大学）仏語部に入学。
1919年 大正8年	20歳	7月、養母・はな、死去。
1920年 大正9年	21歳	3月、東京外国語学校を卒業。日本銀行に勤めたが、すぐ退職。通信社などでアルバイトをしながら文学者を志す。
1921年 大正10年	22歳	10月、京華中学同窓の新進文学者たちと文芸雑誌「現代文学」を創刊。11月、「銀瓶」を寄稿。以後、1924年11月まで9篇の小説と1篇のエッセイを発表。編集面でも活躍。
1922年 大正11年	23歳	1月、フランス駐日大使として来日していたポール・クロードルの講演「仏蘭西文学に就いて」を聴く。2月、「拳」を、3月、「手の戦慄」を、6月「爪喰ひの僧正」を「現代文学」に。8月、短篇「鬼火」で「現代文学」第7号1巻を埋める。10月、短篇「或る午後風の風景」を、11月、短篇「名月」を「現代文学」に。12月「シャルル・ルイ・フィリップの一語」を「日本詩人」に。以後、この雑誌に1924年まで3篇のフランス文学評論を書く。クロードルの講演「フィリップに就いて」を聴く。
1923年 大正12年	24歳	春から本郷菊富士ホテル別館2階に住み、宇野浩二、高田保らを識り、アナキストのグループとも付き合う。5月、山内義雄訳「狭き門」*に「跋」を書く。「ポール・クロードルの立場」を「日本詩人」に。同誌にルビエンスキー「女と影」の考察を翻訳。7月、室生犀星や「日本詩人」のグループを識る。8月、アナトール・フランス「赤い百合」訳刊。9月、関東大震災で新宿区牛込の山内義雄宅に寄宿。慶應義塾仏語会講師となる（翌年3月）。短篇「長助の災難」を「現代文学」に。10月、「詩に関する一考察」を「日本詩人」に連載（翌年3月）。*日記内（p.49他）では「窄き門」と表記
1924年 大正13年	25歳	4月、福岡高等学校にフランス語講師として赴任。同僚に本多顕彰、教える子に福田清人、那須辰造・平岡昇ら。語学のテキストにはロマン・ロランの非戦論「戦の上にあれ」、アナトール・フランス「クランクビーユ」、仏訳「共産党宣言」、和文仏訳に漱石「夢十夜」などを用いたという。「但似理奇蹟解」を「現代文学」に寄稿し、無神論の立場を表明。7月、「文芸思想史に於けるアナトール・フランスの位置」を「南欧文学」に。またこの頃、日本で最初の仏和辞典を編集したラゲエ神父を紹介され、カトリックの精神とフランス文学について話を聞く。10月、ジイド『背徳者』訳刊。
1925年 大正14年	26歳	福岡高校の学生運動を教唆扇動したとして辞職勧告を受け、2学期限りで休職（翌年3月退職）。大晦日に帰京。
1926年 大正15 昭和元年	27歳	この頃、鎌倉妙本寺門前に住む。5月、C・F・ラミュー『悩めるジャン・リユック』訳刊。
1927年 昭和2年	28歳	この頃から東京で放浪生活に入る。翻訳・下訳仕事で生活の資を得ながら山内義雄、高橋邦太郎、安藤更生、海老名雄二、小泉清らと親交。
1928年 昭和3年	29歳	10月、ジイド『法王庁の抜穴』（岩波文庫）訳刊「背徳者」訳を同時収録。
1929年 昭和4年	30歳	3月、「仏蘭西的昏迷」を「時事新報」に4回連載。8月、ジイド『背徳者』（改造文庫）訳刊。
1931年 昭和6年	32歳	この頃、高円寺の海老名弾正宅に居候し、辻潤のグループとつきあう。特に百瀬二郎と親交。
1932年 昭和7年	33歳	この頃、深川富川町の木賃宿に百瀬二郎と暮らす。
1933年 昭和8年	34歳	4月、モリエール『ドン・ジュアン』、「ル・シリアン」訳刊。夏よりエッセイ、評論を寄稿しはじめ、8月、「偶感」を「作品」に。10月、「新詩論」に、カミュー・モークレル「ステファンヌ・マラルメの美学」を翻訳。11月、「背徳者」訳文の脱字」を「作品」に。12月、ジイド『思索と随想』のうち「マックス・スティルネルと個人主義」「ニイチエ」を翻訳。
1934年 昭和9年	35歳	2月、モリエール『人間ざらひ』訳刊。「ジイドの『日記に就いて』を「作品」に。3月「ジイドの顔」を建設社版『ジイド全集』第一巻・月報に。6月、「Nadiaにふれて」を「作品」に。7月「モンテニユの『徳に就て』を「文休」に。10月、モリエール『タルテュフ』訳刊。12月「年齢」を「作品」に。
1935年 昭和10年	36歳	3月、「挨拶」を「紀元」に。5月、短篇「佳人」を「作品」に。牧野信一が称賛。7月、「私小説の読者として」を「文芸通信」に。8月、短篇「貧窮問答」を「作品」に。10月、中篇「羣手」を「作品」に連載（〜12月）。11月、「ドストイエフスキー」を「文芸通信」に。この頃、杉並区馬橋に住む。
1936年 昭和11年	37歳	1月、短篇「山桜」を「文芸汎論」に。同誌は京華中学の後輩で詩人の城左門が主宰し、以後、小品、エッセイを寄稿。4月、短篇「秘仏」を、5月、追悼文「牧野信一氏を悼む」を「作品」に。6月、中篇「善賢」を「作品」に連載（〜9月）。「象徵詩とヴァレリイ」を「福岡日日新聞」に。8月、「質問提出―新居格氏に」を「文芸通信」に。9月、「一休咄」を、10月「降りみ降らずみ」を「文芸汎論」に。12月、短篇「知られざる季節」を「作品」に。「古風な話」を「文芸懇話会」に。「百問随筆に就いて」を「三田文学」に。この頃、文京区白山前に住む。



「赤い百合」扉
アナトール・フランス著 石川淳訳
春陽堂 1923年

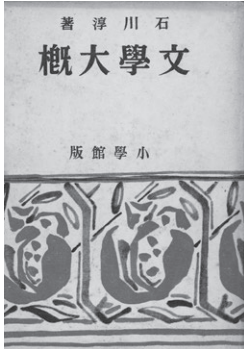
昭和27年	1952年	53歳	1月、短篇「夢の殺人」を「群像」に、「石湧」を「草月」に。3月、「首尾」を「群像」に。4月、随筆集『夷齋筆談』刊。6〜7月、「歌仙」を「群像」に（2回）。9月「夷齋清言」を「文学界」に連載（〜翌年）。10月、短篇「蜘蛛」を「別冊文芸春秋」に、「現代文学の諸問題」（小林秀雄との対談）を「群像」に。随筆集『夷齋俚言』刊。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和27年1月1日―12月31日」／本誌p.41〜57参照
昭和26年	1951年	52歳	2月、短篇「演技」を「文芸春秋」に、『森鷗外集』下巻に「解説」。3月、短篇「さらば垣」を「文学界」に、短篇「常陸帯」を「別冊文芸春秋」に。4月、ジイドむかしばなしを「文学界」に。5月、安部公房「壁」に「序」。6月、短篇「末の松山」を「群像」に、短篇「小公子」を「文芸」に発表し童話の後日譚シリーズ開始（〜1955年）。短篇「ファルス」を「中央公論文芸特集」に。7〜10月、中篇「金縁奇縁」を「別冊文芸春秋」に連載。8月、「夷齋俚言」を「文学界」に連載（〜翌年）。9月、永井荷風『渥美綺譚』（角川文庫）に「解説」。11月、「善人悪人」を「文芸春秋」に。12月、短篇「春の葬式」を「別冊文芸春秋」に。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和25年1月1日―昭和26年12月31日」（本誌上巻に収録）を参照
昭和25年	1950年	51歳	1月、短篇「野守鏡」を「群像」に、短篇「錦木」を「改造文芸」に。3月、短篇「影ふたつ」を「文学界」に。4月、短篇「夜は夜もすがらを」を「群像」に。5月、短篇「南枝向日」を「新潮」に、短篇「瀧のうぐひす」を「別冊文芸春秋」に、「ニセモ」記を「作品」に。6〜7月、短篇「篠松」を「文学界」に連載。10月、短篇「妖女」を「群像」に、短篇「鼻」を「別冊文芸春秋」に、「夷齋筆談」を「新潮」に連載（〜翌年）。11月、短篇「望楼」を「中央公論文芸特集号」に。12月、新潮社版『森鷗外集』を監修、上巻に「解説」。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和25年1月1日―昭和26年12月31日」（本誌上巻に収録）を参照
昭和24年	1949年	50歳	1〜2月、短篇「かれらの酒杯」を「新潮」に連載、長篇「華嚴」を「表現」に連載（〜8月、雑誌廃刊のため6回で途絶）。3月、「懸想文売」を「作品」に。5月、短篇「藤衣」を「別冊文芸春秋」に、短篇「おとしばなし葬送」を「別冊読物時事」に発表し「おとしばなし」シリーズ開始（〜1956年）。小説「新潮」「小説公園」「オール読物」にも掲載。7月、小説集『最後の晩餐』刊、港区芝高輪南町に転居。8月、中篇「善財」を「新潮」に。11月、短篇「片しぐれ」を「文芸春秋」に。12月、短篇「鳳凰」を「別冊文芸春秋」に、談話「夷齋筆談」を「近代文学」に。
昭和23年	1948年	49歳	2月、短篇「変化雑戯」を「表現」に、小説集「処女懐胎」刊。3月、短篇「昼霞」を「新潮」に、短篇「野ざらし」を「文芸春秋」に。4月、世田谷区北沢2丁目に転居。5月、小説集『無尽燈』刊。6月、短篇「双美人」を「人間」に。7月、「太宰治昇天」を「新潮」に。9月、短篇「最後の晩餐」を「文芸春秋」に。全国書房版『石川淳著作集』全6巻刊行開始（〜翌年3月、版元倒産のため4巻で途絶）。
昭和22年	1947年	48歳	1月、短篇「かよひ小町」を「中央公論」に。4月、短篇「いすかのほし」を「人間」に。6月、短篇「雪のイヴ」を「別冊文芸春秋」に。8月、「しのぶ恋」を「改造」に。9〜12月、中篇「処女懐胎」を「人間」に連載。9月「鷗外に関する対話」を『森鷗外研究』に。秋より世田谷区北沢1丁目に住む。11月、小説集『かよひ小町』刊。12月、中篇「飛梅」を「別冊文芸春秋」に。この年から「近代文学」同人らと親交はじまる。
昭和21年	1946年	47歳	を「新女苑」に。10月、短篇「焼跡のイエス」を「新潮」に。11月、小説集『黄金伝説』刊、占領軍の検閲を恐れ表題作は削除。戦前作品の復刊盛ん。12月、短篇「燃える棘」を「別冊文芸春秋」に、「雅歌」を「新生」に。
昭和20年	1945年	46歳	3月、短篇「黄金伝説」を「中央公論」に。以後、ほぼ毎月一作を文芸雑誌に発表。4月、短篇「明月珠」を「三田文学」に。5月、短篇「寒露」を「新潮」に。6月、短篇「窮巷売ト」を「太平」に、短篇「列子」を「青年文化」に。7月、短篇「無尽燈」を「文芸春秋」に。8月、短篇「水郷記」
昭和19年	1944年	45歳	1月、「神のかなしみ」を「東京新聞」に。2月、歴史読物『義貞記』刊。この頃、太宰治と親交。4月、「岡本かの子」を小学館『近代日本文学研究 昭和文学作家論（上）』に。7月、短篇「義経」を「新若人」に。8月、「歴史小説について」を「新潮」に。
昭和18年	1943年	44歳	この頃、六本木の華壇アパートに住む。町内の消防団員に任命される。宇野浩二を囲む「日曜会」に参加。1〜3月、文芸時評「生活と言葉」、「記号と言葉」、「概念と言葉」を「文庫」に。3月、「江戸人の発想法について」を「思想」に。二葉亭四迷を『近代日本文学研究 明治文学作家論（上）』に。9月、岩野泡鳴を『近代日本文学研究 大正文学作家論（上）』に。
昭和17年	1942年	43歳	4月、「言葉と常識」を「文庫」に。雅川渥との対談「森鷗外―その代表作に就いて」を「新潮」に。5月、「祈祷と祝詞と散文」を「現代文学」に。7月、「現代訳日本古典 秋成・綾足集」刊、短篇「雪のはて」を「文学界」に。散文小史―一名、歴史小説はよせを「新潮」に。8月、少年少女読物『渡邊華山』刊。評論随筆集『文学大概』刊。9月、「柳の説」を「文庫」に。11月、文芸時評「善隣の文化に就いて」を「新潮」に。
昭和16年	1941年	42歳	1月、「文学の今日」を「文芸情報」に。3月、伝記『渡邊華山』刊。「ヴァレリーの仮定」を「文庫」に。「歴史と文学」を「文芸情報」に。4月、「マラルメ」を「文芸情報」に。6月、俳諧初心を「文芸情報」に連載（〜7月）。8月「鷗外覚書」を「文庫」に。10月、短篇「張柏端」を、11月「鷗外とリルケ」を「文庫」に。11月、坂口安吾を識る。12月「森鷗外」刊。
昭和15年	1940年	41歳	3月、短篇小説の構成を『現代文章講座』第一巻に。「悪文の魅力」を同月報に。4月、「雑文に就いて」を「文芸情報」に。5月、「文章の形式と内容」を『現代文章講座』第二巻に。「アナトール・フランスの芸術観」を「文芸情報」に。6月、長篇『白描』刊。評論の執筆が多くなる。津田季穂、稲垣足穂らと親交。7月、「スタンダールの芸術観」を、9月、「芸術に於ける虚構（のち「虚構について」に改題）を「エコー」に、12月、「バルザックの芸術観」を「文芸情報」に。
昭和14年	1939年	40歳	3月、長篇「白描」を「長篇文庫」に連載（〜9月）。6月「読書法に就いて」を「読書と人生」に。7月、「ころび仙人」を「若草」に。12月、短篇「蓮酒」を「読書と人生」に。アンドレ・モーロア「アメリカ三九年」訳を「セルバン」に。
昭和13年	1938年	39歳	1月、短篇「マルスの歌」を「文学界」に。反軍国調とされ、雑誌は発禁処分、編集責任者、河上徹太郎とともに罰金刑に。短篇「野天風呂」を「文芸汎論」に。2月、「花の春」を「若草」に。5月、短篇「曾呂利咄」を「文芸汎論」に。9月、「奇術」を「若草」に。10月、短篇「鉄拐」を「科学知識」に。11月、短篇「巷談」を「月刊文章」に。12月、博多の一挿話「のち「ラゲエ神父」に改題」を「旅」に。
昭和12年	1937年	38歳	1月、「不二の夢」を「文芸汎論」に。2月9日、「普賢」が第4回芥川賞に決定。2〜3月、「あけら菅江」を「読売新聞」に。3月「普賢」刊、発表の場が広がる。4月、「礼儀」を「作品」に。5月、「福岡の思出」を「福岡日日新聞」に。6月、短篇「千羽鶴」を「若草」に。8月、「白鳥」を「山陽中国合同新聞」に。9月、「何でもない文章」を「文芸汎論」に。10月、中篇「履霜」を「文芸春秋」に。12月、小説集『山桜』刊。



「普賢」版面荘 1937年



「渡邊華山」三笠書房 1941年



「文学大概」小学館 1942年



池ノ上の仮寓にて 1948年8月 撮影・小島敦子



高輪の仮寓にて 1950年1月「推定」



1952年9月20日、小林秀雄との対談、梅茶屋にて © Kodansha フロ

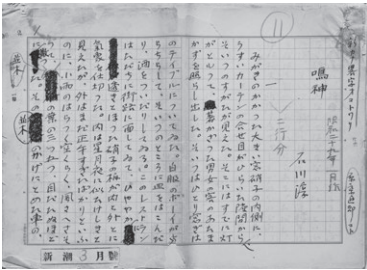
昭和28年 1953年	54歳	2月、杉並区清水町に転居。3月、中篇「鷹」を「群像」に。4月、「新釈雨月物語」を「別冊文芸春秋」に連載（〜翌年）。4月からフランス語非常勤講師として早稲田大学政経学部に出講（〜1955年3月）、6月、日本フランス文学学会で「リルケ」講演。この頃より文壇俳句会に出席。7月、小説集『鷹』刊。8月、三好達治・桑原武夫・大岡昇平らと志賀高原に遊ぶ。11月、中篇「珊瑚」を「群像」に。12月、小説集「珊瑚」刊。
昭和29年 1954年	55歳	2月、「だから、いはないことぢやない」社会時評とは何かを「文芸春秋」に。3月、中篇「鳴神」を「新潮」に。4月、随筆集『夷齋清言』刊。5〜12月、長篇「虹」を「文学界」に連載。9月、小説集「鳴神」刊。10月「坂口安吾との往復書簡」を「新潮」に。12月、短篇「大歳の餅」を「別冊文芸春秋」に。暮れに久保田万太郎を囲む「盆暮会」発足。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和28年1月1日―12月31日」／本誌p.57〜71参照
昭和30年 1955年	56歳	1月、短篇「前身」を「新潮」に、「しぐれ歌仙」を「群像」に、長篇「虹」刊。2月、談話「坂口安吾を悼む」を「別冊文芸春秋」に。4月、短篇「狼」と、「因縁深き浅きか」を「新潮」に、「昭和文学全集57 伊藤整・石川淳集」刊。5月、短篇「犯人」を「中央公論」に。6月、「ホテル気質」を「文芸春秋」に、「安部君について」改稿「安部公房君鎬印」を俳優座の「どれい狩り」プログラムに。8月、「すだれ越し」を「新潮」に。9月、中篇「落花」を「新潮」に。9〜10月、「一虚一盈」を「東京新聞」に連載。12月「諸国崎人伝」を「別冊文芸春秋」に連載（〜1957年）。小説集「落花」刊。
昭和30年 1956年	57歳	1月、短篇「夢の見本市」を「新潮」に。2月、短篇「灰色のマント」を「中央公論」に。4〜5月、「人生ノート 狂気と正気」を「サンデー毎日」に連載。6月、「安吾のある風景」を「文学界」に。7月、中篇「紫苑物語」を「中央公論」に、「墓とホテルと……」を「新潮」に。9月、短篇「まぼろし車」を「新潮」に。10月、野沢喜左衛門節付浄瑠璃放送台本「近松」を「文学界」に、小説集『紫苑物語』刊。
昭和32年 1957年	58歳	1月、短篇「鰐」を「文芸」に。3月、『紫苑物語』により第7回芸術選奨文部大臣賞を受賞。4〜10月、「白頭吟」を「中央公論」に連載。5〜10月、神神―古事記物語を「総合」に連載（6回で途絶。のち「新釈古事記」）。6月「京伝頓死」を「新潮」に。10月『諸国崎人伝』刊。11月、長篇「白頭吟」刊。
昭和33年 1958年	59歳	3月、中篇「八幡縁起」を「中央公論」に。4月、短篇「今はむかしを」別冊文芸春秋」に、「日本語と漢語」を「東京新聞」に連載。7月、中篇「修羅」を「中央公論」に。8月、短篇「蜃気楼」を「別冊文芸春秋」に。小説集「修羅」刊。10月、短篇「遊船」を「声」に。12月、短篇「かくしごと」を「別冊文芸春秋」に。
昭和34年 1959年	60歳	1月、短篇「霊薬十二神丹」を「新潮」に。2月、短篇「怪異石仏供養」を「別冊文芸春秋」に。『南画大体』刊。5月、短篇「狐の生肝」を「新潮」に。『新選現代日本文学全集2 石川淳集』刊。小説集『霊薬十二神丹』刊。7・10月、中篇「影」を「中央公論文芸特集号」に分載。7月「敗荷落日」を「新潮」に、「独立の精神について」を「東京新聞」に連載。8月、短篇「獅子のファルス」を「新潮」に、NHKラジオ第2で池島信平と放送対談。9月、「六世歌右衛門」を、写真集「六世中村歌右衛門」に。11月、短篇「裸婦変相」を「新潮」に。小説集「影」刊。12月、短篇「にせ神父」を「別冊文芸春秋」に。
昭和35年 1960年	61歳	1月、短篇「ほととぎす」を「新潮」に、短篇「大徳寺」を「声」に、「初芝居三ツ物」を文学座の「熱帯樹」プログラムに。2月、「自由について」を「東京新聞」に連載。3月、「蕪村風雅」を「俳句」に。4月、「遠くから見たアルベル・カミユ」を「中央公論」に。5月、「戦中遺文」を「新潮」に。6月、随筆集『夷齋饒舌』刊。15日に明治大学で安保反対の講演。7月、短篇「喜寿童女」を「小説中央公論」に。9月、「政治についての架空演舌」を「新潮」に。10月、短篇「死後の花嫁」を「小説中央公論」に。12月、短篇「ばけの皮」を「別冊文芸春秋」に。
昭和36年 1961年	62歳	1月、短篇「おあいにくさま」を「小説中央公論」に、「横綱の弁」を「酒」に。2月、筑摩書房版『石川淳全集』全10巻刊行開始（〜翌年12月）。4月、短篇「越天楽」を「小説中央公論」に。5月、第17回芸術院賞受賞。7月、「ことばに手を出すな」を「新潮」に。9月、戯曲「おまへの敵はおまへだ」を「群像」に。10月、「京都ぶらぶら」を「きょうと」に、「夷齋遊戯」を「文学界」に連載（〜翌年）。12月、短篇「二人権兵衛」を「別冊文芸春秋」に。この年ドナルド・キーンが『紫苑物語』を英訳。
昭和37年 1962年	63歳	5〜10月、「レス・ノン・ヴェルバ」を「世界」に連載。7月、芥川賞選考委員となる（〜1971年）。
昭和38年 1963年	64歳	1月、短篇「金鶏」を「世界」に、長篇「荒魂」を「新潮」に連載（〜翌年。3月、随筆集『夷齋遊戯』刊。渋谷区代々木上原に転居。8月、「わが万太郎」を「新潮」に。9月、短篇「ゆう女始末」を「世界」に。11月、小説集『喜寿童女』刊、『日本文学全集53 石川淳集』刊。年末、芸術院会員になる。
昭和39年 1964年	65歳	1月、「不幸でなすすぎる」を「中央公論」に、「世界は金色」を「芸術新潮」に、「京劇雑感」を「読売新聞」に。7月、長篇『荒魂』刊。8月、安部公房・江川卓・木村浩らと訪ソ。東独、チェコを巡って、パリに1ヶ月滞在、10月末に帰国。11月、太宰治賞選考委員となる（〜1969年）。12月、渋谷区初台に転居。
昭和40年 1965年	66歳	1月、長篇「至福千年」を「世界」に連載（〜翌年）。3〜8月、紀行「西游日録」を「展望」に連載後10月に刊。
昭和41年 1966年	67歳	1月、短篇「鸚鵡石」を「新潮」に。5月、短篇「無明」を「新潮」に。6月、「現代文学大系52 石川淳集」刊。7月3日、NHK・FMで「石川淳特集」、大江健三郎・奥野建男と対談「紫苑物語の一節を朗読。11月、「詩的回想断片」を「新潮」に。
昭和42年 1967年	68歳	1月、短篇「鏡の中」を「新潮」に、「日本現代文学全集90 石川淳・坂口安吾」刊。2月、川端康成・安部公房・三島由紀夫と「中国文化革命に関し、学問芸術の自律性を擁護するアピール」を表明。長篇「至福千年」刊。4月、戯曲「一目見て憎め」を「中央公論」に（12月に刊）。5月、川端・安部・三島との座談会「われわれはなぜ声明を出したかを、中央公論」に。8月、『日本の文学60 石川淳』刊。11月、革命家の夢」を「朝日新聞」に。12月、「仏界魔界」を「太陽」に。
昭和43年 1968年	69歳	1月、「読み癖」を「きょうと」に、「めぐりめぐって」を「東京新聞」に。2月、「中国の孝道」を読む」を「図書」に。4月、筑摩書房版『石川淳全集』全13巻刊行開始（〜翌年4月）。6月『日本短篇文学全集16 永井荷風・石川淳・大江健三郎』刊。7月、「ダダについて」を「朝日新聞」に。9月、「肉体の運動 精神の運動」三島由紀夫との対談を「文学界」に。



1965年12月、安部公房と初台の家にて
 ◎東京新聞 協力 Abe Kobo official through Japan
 UNAgency, Inc.

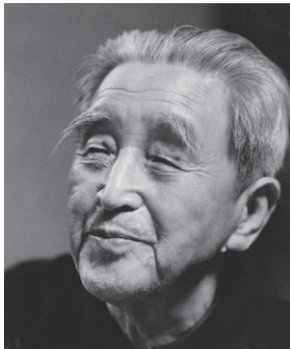


1959年9月、吉田健一と帝国ホテルにて ◎新潮社



「鳴神」原稿

昭和14年 1969年	70歳	1月、短篇「一露」を「新潮」に、「吉備路」を「朝日新聞」に。『現代日本文学館31 石川淳』、『日本文学全集69 石川淳』刊。2月、「若菜」を「中央公論」に。4月、短篇「虎の国」を「文芸」に。5月、『現代日本文学体系76 石川淳・安部公房・大江健三郎集』刊。6月、「文学談断片」を「海」に。7〜9月、中篇「天馬賦」を「海」に連載。7月、インタビュー「絶対的自由と手と」(聞き手・開高健)を「文芸」に。11月、小説集「天馬賦」刊、タケノコの説を安部公房作・演出「棒になった男」公演パンフレットに。12月、「無害は有害といふこと」を「朝日新聞」に。この月より「朝日新聞」で「文芸時評」開始(〜1971年11月)。
昭和45年 1970年	71歳	1月、短篇「武運」を「海」に。5月、『日本の名著21 本居宣長』(中央公論社)を責任編集。6月、『カラー版日本文学全集32 石川淳』刊。7月、雑誌「西脇順三郎との対談を」都市に。12月、破裂のために集中する(三島由紀夫との対談を「中央公論」に。この年、秋の叙勲での勲三等の打診を断る。
昭和46年 1971年	72歳	1月、「舌を結ぶ」を「海」に。2月、長篇「狂風記」を「すばる」に連載(〜1980年)。5月、随筆集『夷齋小識』、『現代十人の作家5 石川淳の自選作品集』刊。7月、『現代日本の文学18 石川淳集』刊。11月、岩波書店版『鷗外全集』月報連載(〜1975年)。
昭和46年 1972年	73歳	5月、「大和国原」を「週刊読売臨時増刊」に。「朝日新聞」の文芸時評集『文林通言』刊。7月31日、「江戸文学について」講演。9月、『新潮日本文学33 石川淳集』刊。
昭和48年 1973年	74歳	1月、「関谷学校」を「読売新聞」に。2月、『豪華版日本文学全集69 石川淳集』刊。3月、「一夜百詠」を「朝日新聞」に。10月、大佛次郎賞審査委員となる(〜1980年)。
昭和49年 1974年	75歳	1月、筑摩書房増補版『石川淳全集』全14巻刊行開始(〜翌年3月)。3月、安東次男・丸谷才一・大岡信と歌仙を巻き、「新酒の巻」を「図書」に。10月、「恩人」を『回想の古田晃』に。
昭和50年 1975年	76歳	2月、「四畳半樓の下張」裁判のため東京地裁に弁護側証人として出廷。3月、「遊びの精神」(佐々木基一との対談を「文芸」に。3月下旬より4月上旬にかけ、学術文化使節団の一員として訪中。4月、「四畳半樓の下張裁判について」を「世界」に。5月、「文学的雑誌」丸谷才一との対談を「国文学」に。6〜8月、「北京独吟」を「世界」に(3回)。9月、『鷗外全集』月報を纏めた随筆集『前賢餘韻』刊。10月29日、京都会館で「文学と生活」講演。
昭和51年 1976年	77歳	1月、「江戸と西洋」(中村真一郎との対談を「海」に。3月、檀一雄追悼文「花たちばな」を「新潮」に。5月、随筆集『夷齋虚実』刊。12月、「椿」を「アニマ」に。
昭和52年 1977年	78歳	1月、「言葉・文化・政治」(安部公房との対談を「波」に。4月、「夷齋華言」を「新潮」に連載(〜翌年)。8月、「江戸期の文学」(下ナルド・キーンとの対談を「海」に。9月、「我鬼先生のこと」(大岡信との対談を「図書」に。10月、対談集『夷齋座談』刊。
昭和53年 1978年	79歳	1月、「湯ぶくれの歌」を「朝日新聞」に。5月上旬より6月上旬にかけて、活夫人とフランス、イタリア、オランダに遊ぶ。10月、紀行「西遊五月の花」を「すばる」に。11月、岩波書店版『鷗外全集』を単独編集。12月、「こめん下さい」を「図書」に。
昭和54年 1979年	80歳	1月、「続夷齋華言」を「新潮」に連載(〜翌年)。8月、中野重治追悼の談話「思想に詩人の感覚」を「朝日新聞」に。11月、岩波書店版『石川淳選集』全17巻刊行開始(〜1981年3月)。
昭和55年 1980年	81歳	1月「東京言葉」(大野晋・幸田文・丸谷才一との座談)を「図書」に。5月、杉本秀太郎・丸谷才一との歌仙「旅衣の巻」を「図書」に。6月、「江戸の文人と遊び」(中村真一郎との対談を「波」に、随筆集『江戸文学掌記』刊。8月、港区南青山に転居。10月、長篇『狂風記』上・下巻刊。11月、「文学の核心」(丸谷才一との対談を「すばる」に)。
昭和56年 1981年	82歳	1月、「宿なし日記」を「すばる」に。2月、『江戸文学掌記』により読売文学賞を受賞。安東次男・丸谷才一・大岡信との共著『歌仙』刊。6月、長篇『六道遊行』を「すばる」に連載(〜翌年)。10月、丸谷才一・結城昌治・野坂昭如・井上ひさしとの歌仙「市に五虎の巻」を「週刊朝日」に。
昭和57年 1982年	83歳	1月、昭和56年度朝日賞(文化賞)を受賞。4月、「現代の随想16 石川淳集」刊。10月半ばから、全国農協の米のCFで「鉢投げて米俵飛ば秋の空」の句が放送された(野坂昭如・大岡信・丸谷才一の句とともに)。
昭和58年 1983年	84歳	1〜12月、「夷齋風雅」を「すばる」に連載。3月、岩波書店版『露伴随筆』全5巻を編集。4月、長篇『六道遊行』刊行。11月、大岡信・杉本秀太郎・丸谷才一らの共著『酔ひどれ歌仙』刊。
昭和59年 1984年	85歳	1月、長篇「天門」を「すばる」に連載(〜翌年)。
昭和60年 1985年	86歳	1月、大岡信・丸谷才一との歌仙「初露の巻」を「すばる」に。12月、大岡信・丸谷才一・杉本秀太郎との歌仙「紅葉の巻」を「すばる」に。
昭和61年 1986年	87歳	1〜12月、「続夷齋風雅」を「すばる」に連載。1月、長篇「天門」刊。12月、大岡信・丸谷才一との歌仙「夕紅葉の巻」を「すばる」に。
昭和62年 1987年	88歳	1月、長篇「蛇の歌」を「すばる」に連載(〜翌年、16回で死去のため途絶)。7月、インタビュー「蜀山人とその周辺」(聞き手・田中優子)を「文学」に。12月29日、東京都新宿区の社会保険中央病院で、肺癌による呼吸不全で死去。遺志により宗教的な葬儀は行わず。
昭和63年 1988年		1月22日、千日谷会堂で「石川淳と別れる会」が催され、中村真一郎・加藤周一・安部公房・丸谷才一・武満徹が別れの言葉を述べる。4月、長篇『蛇の歌』、随筆集『夷齋風雅』刊。
昭和63年 1989年 平成元年		筑摩書房版『石川淳全集』(〜1992年、全19巻)
令和3年 2021年		4月24日〜9月26日、世田谷文学館コレクション展で「受贈記念 夷齋先生・石川淳」開催。



晩年の石川淳



1981年3月、原宿を歩く © 新潮社



初台の家の庭にて、愛犬クロ(ワロー)ばうやとも。1967年〜80年まで飼う。

椎名麟三 年譜

本年譜は、「椎名麟三全集」全23巻（冬樹社）、斎藤末弘「椎名麟三の文学」（桜楓社）、姫路文学館「特別展 没後50年 姫路が生んだ二人の作家 阿部知二と椎名麟三」展 図録ほかを参照し、講演記録に焦点を当て、作成しました。

明治41年	0歳	10月1日、兵庫県飾磨郡曾左村之内書写村（現・姫路市書写東坂）に、父・大坪熊次・母・みすの長男として生まれる。本名・大坪昇。生後3日目に母の自殺未遂事件があり、大阪で警察官をしていた父のもとへ母子ともに移る。
1918年 大正7年	7歳	4月、大阪市立中大江尋常小学校に入学。
1920年 大正9年	9歳	11月、父母が別居し、母、妹、弟と曾左村に帰る。12月、曾左村立尋常高等小学校に転入学。
1922年 大正11年	11歳	この頃、近所の青年画家・福本熊一のもとで文芸雑誌に親しむ。
1924年 大正13年	13歳	3月、曾左村立尋常高等小学校を卒業。4月、県立姫路中学校（現・姫路西高等学校）に入学。
1926年 大正15・昭和元年	15歳	5月、姫路中学校を退学。6月、父からの送金が途絶え貧窮。交渉のため一人大阪の父のもとに行くが追い返され家出。見習コック等の職を転々とする。
1927年 昭和2年	16歳	この頃、アウグスト・ペーベル『婦人論』を読み、社会主義を知る。独学で専門学校入学資格検定試験（英語）を受け合格。
1929年 昭和4年	18歳	4月、母が須磨海岸で入水自殺を図る。新聞記事でこの記事をみた昇は、匿名にもかかわらず母親だと直感。カフェを辞し、須磨署で母と面会。これをきっかけに6月、宇治川電機電鉄部（現・山陽電気鉄道）に車掌見習いとして入社。その後労働運動に参加、刷新同盟を結成し、さらに全協（日本労働組合全国協議会）の組織下に入る。
1931年 昭和6年	20歳	8月、関西を中心にした日本共産党の一斉検挙があり、東京へ逃れる。9月、目黒にいた父を訪ねた際に高輪署員に検挙され、神戸地裁で懲役4年の判決を受ける。
1932年 昭和7年	21歳	未決囚として、神戸の留置場をたらい回しにされる。7月、大阪刑務所の未決監に回される。拘禁中、ニーチェの『この人を見よ』を読み、衝撃を受ける。
1933年 昭和8年	22歳	獄中で転向上申書を書く。4月、父熊次と母みすの協議離婚が成立。その後みすは自殺を遂げる。同月末、昇は懲役3年、執行猶予5年の判決を受け、大阪刑務所から出所。5月頃、マッチ工場で雑役夫として働く。8月、父を頼って上京、防水紙の製造、運送屋などを転々とする。
1934年 昭和9年	23歳	12月、銀座のレストラン「ニュー・パレス」でともに働いていた祖父寿美と実質上の結婚。芝区（現・港区）に住む。
1935年 昭和10年	24歳	本所区（現・墨田区）の寿美の実家に住む。8月、長男一裕誕生。
1936年 昭和11年	25歳	2月、同心社に就職し、筆耕となる。
1938年 昭和13年	27歳	1月、祖父寿美との婚姻届出。4月、筆耕の仕事ぶりが評価され、東京丸の内の新潟鉄工所社員となる。同僚に詩人の北川省一がいた。この頃、ニーチェに導かれ、ドストエフスキーの『悪魔』を読む。衝撃を受け、文学への関心を高める。6月、本名で「島長の家」を脱稿。12月、「焰の槍」で初めてペンネーム「椎名麟三」を用いる。この名前は労働運動時代の変名を組み合わせたもの。
1939年 昭和14年	28歳	1月、「男の言葉」脱稿。短篇「悪魔と神を」「文芸首都へ送る。年末、佐々木翠「のちの船山馨夫人」を紹介され、同人雑誌「創作」を知る。
1940年 昭和15年	29歳	8月、同人雑誌「新創作」（旧「創作」）の正式な同人となる。同人には船山馨、佐々木翠、寒川光太郎（この年、芥川賞受賞）らがいた。12月、「第壹号試掘井」を脱稿。
1941年 昭和16年	30歳	1月、「家」を「新創作」に発表。2月、「新創作七人集」（創作社）に「第壹号試掘井」が収録される。
1942年 昭和17年	31歳	3月、新潟鉄工所が戦車製造を開始したことに嫌気が差し、同社を退職する。6月、長女真美子誕生。この頃、長篇「胎動」を書き上げ、船山馨が河出書房に持ち込むが、不採用。原稿は預けられたまま、1945年5月の空襲で社屋と共に灰燼に帰す。
1943年 昭和18年	32歳	3月、豊国社の高田俊郎を保証人として、世田谷区松原に家を買ひ、転居。同月、妹和子の結婚式のため、大阪へ旅行。9月、第1回の召集を受けるが、肺浸潤のため即日帰郷。12月、大阪旅行を材料として『霧の旅愁』を脱稿するが未発表。
1944年 昭和19年	33歳	1月頃、近所に住んでいた友人荒本守也から『キルケゴール選集』を借りて読み、強い影響を受ける。この年、2度目の召集を受けるが、タバコを水に溶かして飲み、体調不良となった結果、即日帰郷となる。
1945年 昭和20年	34歳	3月10日、東京大空襲。翌日、船山馨と妻の実家を目指し本所の焼跡を歩き、その帰途、文学への決意を確認しあう。8月15日、終戦。9月頃、船山馨や実弟、実らと資本・印刷・出版を目的とした創美社を創立。世田谷区の京王線・千歳烏山駅前に事務所を設ける。
1946年 昭和21年	35歳	1月、創美社から船山馨『雅情歌』を1万部刊行。売れ行き好調のため、第2回配本として井野貞一の反戦小説『軌の下』を2万部刷るが、民間情報教育局の検閲で削除訂正の注文がつき、発行を断念。借金がのこり、創美社は春頃に廃業となった。8月、第3回配本として予定していた『黒い運河』を脱稿。その後、「深夜の酒宴」と改題改作し、出版社各所へ持ち込むが不採用。その後、田村元の実存主義的論文を掲載していた筑摩書房の雑誌「展望」に送る。年末、編集者臼井吉見より採用の電報を受ける。
1947年 昭和22年	36歳	2月に「深夜の酒宴」が「展望」に掲載され、作家としてデビューする。6月、「重き流れのなかに」を「展望」に発表。



1921年頃

後列左から、昇父・熊次、妹・和子、弟・実母・みす



中学2年頃



1930年

車掌時代 前列・椎名



1939年頃

寿美と



1939年頃

井の頭公園にて長男・一裕と



小石川・豊国社にて。同社は「新創作」の支援者であった

昭和36年 1961年	50歳	1月、文庫判随筆集『私の人生手帖』刊。5月、『長い谷間』刊。8月、上原教会夏期集会で「交りの現実性」と題して講演。10月、キリスト教兄弟団15周年記念の講演旅行の一環として、西南学院大学で講演。11月、武田泰淳、堀田善衛、中村光夫とともに訪中文学者代表団の一員として広州、北京、上海等を訪問、12月に帰国。同月、シンドニー・ジェファード訳による『愛の証言』がイギリスで刊行。
昭和35年 1960年	49歳	3月、教文館遺愛室にて、佐古純一郎・阿部光子・高見沢潤子らとプロテスタント文学集団「たねの会」を結成。6月、中野重治・高見順らとともに「安保批判の会」に入り、デモに加わる。同月、軽井沢星野温泉でひらかれた「キリスト教と文学の会」で「表現について」と題して講演。7月、上原教会夏期集会で「芸術と方法」と題して講演。10月、名古屋市名鉄ホールにて「自由と文学について」と題して講演。同月、『霞と毒』刊。この年、テレビドラマ「自由への証言」により芸術祭奨励賞受賞。
昭和34年 1959年	48歳	3月、「指」百号記念会で聖書の非神話化問題をめぐり、赤岩栄牧師との信仰的立場の違いが表面化する。4月、随筆集『生きる意味』刊。5月、テレビドラマ「その男がNHK大阪で放送。6月『新選現代日本文学全集25 椎名麟三集』刊。7月『明日なき日』刊。キリスト教兄弟団夏期修養会で「信仰と文学」と題して講演。8月、上原教会夏期集会で「現代の状況」と題し、遠藤周作とともに講演。9月、創作集『断崖の上で』『現代長編小説全集39 椎名麟三・武田泰淳集』刊。11月、同志社大学で「矛盾と自由」と題して講演。
昭和33年 1958年	47歳	2月、『現代日本文学全集82 椎名麟三・野間宏・梅崎春生集』刊。8月、上原教会夏期集会で「人間の復権」と題して講演。11月、大阪府池田市五月山教会で「文学と救い」と題して講演。創作集『雨は降り続けている』刊。
昭和32年 1957年	46歳	3月、「指」百号記念会で「文学と宗教をめぐって」と題して講演。5月、長篇『美しい女』を「中央公論」に連載（～9月）。7月、上原教会夏期集会で「聖書をどう読んできたか―聖書の三段階―」と題して講演。8月、東京YMCAで講演。同月、かつて勤務していた山陽電鉄に招かれ、久しぶりに姫路の書写に帰郷。3月『自由の彼方で』刊。5月、『新日本文学』の文学教室で講演。6月、早稲田奉仕園で講演。8月、上原教会夏期修養会で「文学的生活における信仰の意味」を講演。10月、日本読書会で講演。12月、『第三の証言』が劇団青年座の旗揚げ公演で上演される。
昭和31年 1956年	45歳	2月、新書判『私の聖書物語』刊。4月、詩人の大岡信と劇作家の深瀬サキの婚礼で仲人をつとめる。7月、関西学院大学で「現代とニヒリズム」と題して講演。8月、上原教会夏期集会で「聖書における不条理について」と題して講演。同月、川原湯温泉高山旅館で原稿執筆中に心筋梗塞で倒れ、翌月、慶應病院に入院。退院後、自宅療養を続けたが、再び東大病院に入院。11月、『椎名麟三作品集』（講談社、全7巻）刊行開始。12月、連作推理小説集『新作の証言』刊。
昭和30年 1955年	44歳	1月、「指」50号記念会で「文学と宗教をめぐって」と題して講演。5月、長篇『美しい女』を「中央公論」に連載（～9月）。7月、上原教会夏期集会で「聖書をどう読んできたか―聖書の三段階―」と題して講演。8月、東京YMCAで講演。同月、かつて勤務していた山陽電鉄に招かれ、久しぶりに姫路の書写に帰郷。3月『自由の彼方で』刊。5月、『新日本文学』の文学教室で講演。6月、早稲田奉仕園で講演。8月、上原教会夏期修養会で「文学的生活における信仰の意味」を講演。10月、日本読書会で講演。12月、『第三の証言』が劇団青年座の旗揚げ公演で上演される。
昭和29年 1954年	43歳	1月、『昭和文学全集29 椎名麟三・野間宏・梅崎春生集』刊。2月、東京YMCAで講演。同月、かつて勤務していた山陽電鉄に招かれ、久しぶりに姫路の書写に帰郷。3月『自由の彼方で』刊。5月、『新日本文学』の文学教室で講演。6月、早稲田奉仕園で講演。8月、上原教会夏期修養会で「文学的生活における信仰の意味」を講演。10月、日本読書会で講演。12月、『第三の証言』が劇団青年座の旗揚げ公演で上演される。
昭和28年 1953年	42歳	3月、映画『煙突の見える場所』（原作「無邪気な人々」）が全国上映、のちにベルリン国際映画祭で上映され、国際平和賞を受賞した。4月、五所平之助と新潟県高田市へ講演旅行を行う。6月、聖書神学校 実践女子大学で講演。9月、初のオリジナルシナリオを収録した創作集『愛と死の谷間』刊。12月、『新日本文学』の文学学校で講演。
昭和27年 1952年	41歳	4月、長篇『邂逅』を「群像」に連載（～10月）。5月、東京大学五月祭「アヴァンギャルド文芸大講演会」に安部公房・白井健三郎・佐々木基一らと参加。6月、YMCA、國學院大學で講演。7月、『無邪気な人々』を「文学界」に発表。映画プロデューサーの内田義重から同作映画化の申し入れがあったが、はじめ断る。その後、映画監督・五所平之助の強い希望があり、小国英雄と同作を下敷きにした脚本「煙突の見える場所」を完成させる。同月、横浜YMCAで講演。8月、東電文化会館にて講演。10月、『新文学全集 椎名麟三集』刊、新日本文学会東京支部長となる。11月、京都大学、同志社大学で講演。12月、『邂逅』刊。
昭和26年 1951年	40歳	4月、創作集『嫉妬』、書き下ろし長篇『赤い孤独者』刊。5月、早稲田大学大隈講堂で赤岩牧師とともに講演。11月、東京大学で講演。
昭和25年 1950年	39歳	2月、新宿の中村屋にて「新日本文学」平和を守る会主催の講演会で豊島与志雄とともに講演、創作集『病院裏の人々』刊。4月、ライオンはみがきKKにて講演。11月、自由大学で講演。この年は思想的に行き詰まりを感じ、毎日のように新宿駅西口のハモニカ横丁を飲み歩く。12月下旬、日本基督教団上原教会（赤岩栄牧師で洗礼をうける。雑誌「指」を創刊。
昭和24年 1949年	38歳	2月、評論集『自由を求めて』刊。5月、夜の会「新しい芸術の探求」刊。椎名の「人間の条件について」が収録される。11月、月曜書房版『深尾正治の手記』、『その日まで』刊。12月、野間宏、花田清輝とともに編集の『戦後主要作品全集』刊。この年、失踪していた父熊次が自殺していたことを知る。
昭和23年 1948年	37歳	1月、創作集『重き流れのなかに』、創作集『深尾正治の手記』刊。同月、岡本太郎、花田清輝らが結成した「夜の会」に参加。4月、書き下ろし長篇『永遠なる序章』を脱稿。この頃、荒本守也が腸捻転が原因で死去、大きなショックを受ける。5月、船山馨と新人発掘のために雑誌「次元」を創刊。同月、松本市の松本中学校、慶応義塾大学で講演。6月『永遠なる序章』刊、『近代文学』第二次同人拡大に伴い、梅崎春生、武田泰淳らと共に加入。同月、雑誌「個性」の座談会で赤岩栄牧師と出会う。10月、戦後派作家を集めた雑誌「序曲」のための座談会に出席する。同月、戦後派作家として注目を集めていた梅崎春生が松原に引越してくる。以後親しく付き合うようになる。12月、『序曲』創刊。創刊号の編集人をつとめたが、同誌は1号で終了となる。



1948年 梅崎春生宅にて。左から梅崎 頼尊清
隆、椎名 尾崎宏次



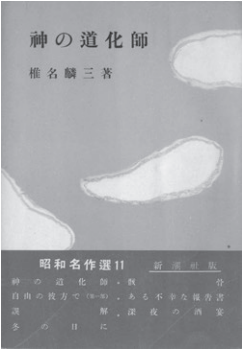
1948年頃 寿美夫人・長女真美子と



赤岩栄牧師と



「自由の彼方で」講談社 1954年



「神の道化師」新潮社 1955年

少年の家出を題材にした表題作をふくむ短編集

昭和37年 1962年	51歳	3月、東京神学大学同窓会で「自由と共存」と題して講演。5月、創作集『媒酌人』刊。7月、たねの会総会で「小説の技術について」と題して講演。8月、女子学院で講演。10月、たねの会で「小説の面白さについて」講演。神奈川労働大学で「私は何故小説を書くか」と題して講演。仙台尚絅女学院（現・尚絅学院）で「文学とは何か」と題して講演。11月、京都医大で「自由の方向」、関西学院で「文化と自由」と題して講演。 *「椎名麟三講演メモ9」（本誌上巻に収録）
昭和38年 1963年	52歳	1月、文芸首都の会で講演。2月、『新日本文学全集17 椎名麟三集』刊。4月、国際日本研究所で「愛について」と題して講演。6月、墨田の聖パウロ教会で「生きる意味」と題して講演。同月、同志社大学で「現代の非人間性」*と題して講演。7月、大阪文学学校で「文学の視点」と題して講演。9月、創作集『カラチの女』刊。秋頃より心臓病が悪化し、医師から執筆を禁止された。11月、同志社中・高等学校生徒に「ヨハネによる福音書第八章について」と題して講演。同月、ミュージカル「姫山物語」の試演が姫路高等学校で行われる。12月、『日本文学全集61 椎名麟三集』刊。 *「椎名麟三講演メモ16」/本誌p.86～88参照
昭和39年 1964年	53歳	6月、「姫山物語」が姫路市厚生会館で上演。12月、新書判随筆集『信仰というもの』刊。
昭和40年 1965年	54歳	3月、『日本現代文学全集98 椎名麟三・梅崎春生集』刊。7月19日、梅崎春生が肝硬変で急逝。葬儀委員長を務める。同月、『日本青春文学名作選24 夏目漱石・太宰治・椎名麟三集』刊。8月、国際日本研究所夏期セミナーで「文学と宗教」と題して講演。10月、梅崎春生文学碑建立のため、檀一雄・埴谷雄高らと鹿児島県内をめぐる。11月、たねの会総会で「文学における救いの視点」と題して講演。
昭和41年 1966年	55歳	3月、朝日新聞社講堂にて「信徒の友」たねの会の共催で講演会が行われ、「ドストエフスキーと私」と題して講演。5月、鹿児島県坊津で梅崎春生文学碑除幕式が行われる。同月、鹿児島教会で「現代人は孤独に耐えられるか」と題して講演。7月、日本基督教団三鷹教会へ転籍、「現代の文学」28 椎名麟三集刊。8月、たねの会総会で「信仰と実作」と題して講演『現代文学大系56 椎名麟三集』刊。12月、評論・随筆集『地底での散歩』刊。
昭和42年 1967年	56歳	5月、『私のドストエフスキー体験』、自伝『凡愚伝』、『われらの文学3 椎名麟三・梅崎春生集』刊。8月、たねの会総会で「キリスト教における文学の理念」と題して講演。
昭和43年 1968年	57歳	1～12月、『椎名麟三人生論集』（全5巻）刊。7月、創作集『勤人の休日』刊。8月、たねの会総会で「小説における方法」と題して講演。9月、『日本短篇文学全集21 有島武郎・椎名麟三・遠藤周作集』刊。
昭和44年 1969年	58歳	8月、たねの会総会で「表現にたいする積極的態度」と題して講演。同月、書き下ろし長篇『懲役人の告発』刊。12月、『カラー版日本文学全集36 椎名麟三・梅崎春生・武田泰淳集』刊。
昭和45年 1970年	59歳	6月、『椎名麟三全集』（1979年、全23巻、別巻1巻刊行開始。10月、創作集『変装』刊。11月、戯曲『悪霊』刊。この年、英訳本『媒酌人』がアメリカで刊。
昭和46年 1971年	60歳	1月、自選戯曲集『蠟を飼う女』刊。2月、『現代日本の文学38 椎名麟三・梅崎春生集』刊、『新潮日本文学40 椎名麟三集』刊。8月、『現代日本文学大系80 椎名麟三・梅崎春生集』刊。この年、「展望」の全4回の座談会に中村真一郎・埴谷雄高・武田泰淳・野間宏・堀田善衛らと出席。
昭和47年 1972年	61歳	3月、『現代キリスト教文学全集』（教文館）の監修を遠藤周作とともに引き受ける。8月、たねの会総会で「リアリズムについて」と題して講演。心臓発作にたびたび襲われる。
昭和48年 1973年		3月28日、脳出血のため、松原の自宅2階の書斎で逝去、61歳。30日、三鷹教会で葬儀を営んだ。喪主は長男・大坪一裕、葬儀委員長は埴谷雄高。本多秋五、堀田善衛、大江健三郎、船山馨、佐古純一郎らが弔辞を述べた。6月、富士霊園に埋葬。
昭和50年 1975年		2月、『椎名麟三初期作品集』刊。
昭和52年 1977年		『椎名麟三信仰著作集』（1982年、全13巻）刊。
令和5年 2023年		4月22日～9月3日、世田谷文学館コレクション展で「没後50年・椎名麟三と『あさつて会』開催。12月2日～翌年2月4日、姫路文学館で「没後50年 姫路が生んだ二人の作家 阿部知二と椎名麟三展」開催。



1963年頃 軽井沢にて椎名夫妻



梅崎春生文学碑除幕式の道中 左から椎名、埴谷雄高



晩年の姿 松原の自宅前にて



椎名麟三葬儀。埴谷雄高が葬儀委員長をつとめた

謝辞

本誌刊行にあたり、格別のご協力を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力（敬称略・50音順）

安部賢治

池澤一郎

石川眞樹

梅崎知生

大坪真美子

木村剛太郎

白洲明子

永井頼子

講談社

新潮社

SOMPO美術館

東京新聞

日本ユニ・エージェンシー

世田谷文学館 収蔵資料〈調査と探究〉02

石川淳／椎名麟三〔下巻〕

監修 紅野謙介

翻刻・編集 世田谷文学館

小池智子 瀬川ゆき 竹田由美 中垣理子 原辰吉

校閲 株式会社尾野製本所校閲部

撮影 栗原論 高橋宗正

デザイン 溝端貢 (ikaruga.)

印刷 共同製本株式会社

発行日 2025年2月27日

編集・発行 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

Tel.03-5374-9111

<https://www.setabun.or.jp>

*著作権等については極力調査いたしましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

©2025 Setagaya Literary Museum